

## 訓読『平家打聞』(一)(巻一―巻三)

### 中世文学輪読会

はじめに

本稿は、四部合戦状本『平家物語』(以下四部本と略称)の注釈書と目される『平家打聞』の訓読を試みたものである。『平家物語』の最古の注釈であり、その中に見られる一見荒唐無稽な知識や、『私聚百因縁集』・『神道集』・真名本『曾我物語』等と関連する説話など、中世の特異な注釈世界の一角を占める資料として、近年とみに注目を集めているといえよう。

しかしながら、『平家打聞』は、四部本と同じく、特殊な真名表記の本文をもつがゆえに、通読は必ずしも容易であるとはいえない。そこで、その資料的価値をかんがみ、今回鳥原松平文庫本の読み下しを提示することにした。むろん、あくまで試訓の域を出ないものであり、訓読上問題を残している箇所も多い。大方の御批正を切にお願いする次第である。

なお、今回『平家打聞』の訓読を作成した「中世文学輪読会」(仮称)について一言しておく。本会は、同志社大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了者である稲田秀雄・谷村茂・岩名紀彦の三名により、中世文学の諸作品を読む勉強会のつもりで始めたものである。一九八八年十月より、ほぼ月一回のペースで催し、『平家打聞』を適宜分担して、訓読本文の作成と必要最低限の注釈を試みるかたちで進めてきた。後に、宇野陽美・田中正人・水谷亘が加わり、一九九〇年三月をもって全体の訓読を一応完了している。その間、加美宏先生には当初より、生形貫重・佐伯真一両氏には中途より、オプザーバーとして御参加を得、一貫して有益な御助言・御教示をいただいたことを特記しておきたい。(稲田)

#### 凡例

○本稿は『平家打聞』の読みやすい訓読本文を提供することを目的

とし、前記輪読会のメンバーのうち、稲田・谷村・岩名の三名が巻一―巻三までを適宜分担して作成した礎稿をもとに、輪読会全体で討議を行い、手を加えて成稿としたものである。

○底本の島原松平文庫本（底）と略記）は、黒田彰氏「島原松平本『平家打聞』〈影印・上〉」（関西大学『国文学』63 昭61・10）により、同氏の翻刻（島津忠夫氏監修『日本文学説林』所収）も参照させていただいた。対校本とした山岸徳平氏旧蔵本（山）と略記）は、佐伯真一氏に御恵与いただいたコピーによった。貴重な資料の訓読本文掲載をお認めいただいた島原松平文庫をはじめ、多大な学恩を蒙った黒田彰氏、山岸本のコピーを提供して下さった佐伯真一氏には、深く謝意を表する。

○基本的には底本の訓点に従って訓み下すこととし、私意による補いは最小限にとどめたが、底本の訓点自体に誤りもあるので、文意の通りにくい部分をあえて残している。御了承願いたい。

○内容に応じて適宜段落を区切り、句読点を施した。

○底本の用字は現在通行の字体に改めた。

○助詞・助動詞にあたる漢字は平仮名に改めた。

○漢字一字分の繰り返しは「々」を用い、二字以上はそのまま繰り返し表記した。平仮名の繰り返しの「く」は用いた。

○「玉ふ」・「下ふ」は平仮名に統一し、「たまふ」と表記した。

○「于時」は「時に」、「爾時」は「爾の時」と表記した。

○振り仮名は底本にあるものを平仮名、私意によるものを片仮名で示した。その際、歴史的仮名遣いを用い、濁点を適宜施した。

○送り仮名は底本にないものも必要に応じて送った。その際、歴史的仮名遣いを用い、濁点を適宜施した。また、底本に存する送り仮名についても適宜濁点を施した。

○送り仮名のうち、「ノ」は「して」、「ト」は「こと」と改めた。

○会話及び引用文には、「」を付した。

○割注は一行に書き下し、「」を付した。

○傍書は底本のままに残した。

○明らかに脱字と思われるものは私に補い、（ ）を付して示した。

○被注釈語（見出し語）と認められるものをゴチックで示した。欠巻などのために四部本文の中に検出できない場合も、推測によって同様に示した。

○底本表記を対校本によって訂した場合は、注を付してその旨をことうたわした。

○対校本によっても訂し得ない不審な箇所は（ママ）と注記した。

○底本の明らかに誤りと考えられる箇所、または意味不明箇所限り、依拠資料（後掲）によって訓読の参考としうる場合は、注を付して依拠資料の対応箇所を掲げた。その際、依拠資料は以下のよう

に略記した。例、「私聚百因縁集」↓(百)

○黒田彰氏翻刻本文(「黒田氏翻刻」と略記)も参照し、疑問の残る箇所については、注を付して異同を示した。

(以上、注は訓読に必要な最小限のものにとどめ、すべての校異を掲げるものではないことをおことわりしておく。)

○四部本における被注釈語の位置(上下の別・頁数・左右の別・行数)を汲古書院刊影印本(上下二冊)によって、各段落ごと一括して掲げた。四部本と「平家打聞」とで用字の異なる場合は、( )内に四部本の用字を示した。

例、照宣公―上六四左4(昭宣公)

○今回掲載分に対応する依拠資料は次の通りである。

巻二「伝教」注↓「私聚百因縁集」巻七―六「伝教大師事」

同「慈覚大師」注↓「私聚百因縁集」巻七―七「慈覚大師事」

巻三「五台山」注↓「私聚百因縁集」巻五―七「五台山記事」

同「日吉山王」注↓「神道集」巻三―八「高座天王事」

(引用の際、「私聚百因縁集」は古典文庫によった。)

平家打聞 第一巻

祇園精舎は、須達の建立。此の須達は曾婆羅王の玄孫。沙羅双樹は、拘尸那国拘尸那城跋提河の辺、釈尊入滅の処。涅槃經の説く処

なり。漢の王莽は、裏書のごとし。秦の超高は、秦の始皇の子、二世太子の臣下。梁の周異は、梁の高王の臣下。唐の禄山は、唐の玄宗皇帝の時、世を乱し、楊貴妃を馬嵬堤にして失ひし人なり。

祇園精舎―上二左3 沙羅双樹―上二左3 漢の王莽―上二左6 秦の超高―上二左6 梁の周異―上二左6 唐の禄山―上二左6

大臣は、<sup>①みかど</sup>公の御身近に付く人。雄剣は、大臣の用ひしむる大刀。

公宴は、公卿の座。格式は、礼法を守る事。偷言は、宣旨。執政は、閔白の撰政を兼ねる事。御師範は、国王の御烏帽子親。義形は、万機の政を官<sup>つかさど</sup>どる事。禁門は、国王出入の惣(門)。京師は、国王。長吏は、閔白。釈門は、仏道なり。塵寛は、皇居の俗家。堪寛は、

思惟の義。群籍は、文の名。礪然<sup>こころ</sup>は、義を亡ずる事。麗従は、檢非違使の名。麗景殿は、清涼殿と紫宸殿の間。

大臣―上二右5 雄剣―上五左6 公宴―上五左6 格式―上六右

1 偷言―上六右1 執政―上九右1 御師範―上九右1 義形―

上九右2(儀形) 禁門―上二〇左4 長吏―上二〇左4 釈門―

上二七左6 塵寛―上二七左6 堪寛―上二七左6(勘寛) 群籍

―上二八右1 礪然―上二八右1 扈従―上二八右2 麗景殿―上

二〇左3

① 振り仮名は(山)による。(底)なし。

周公は、文王。旦成は、御子の東宮。忠仁公は、冬嗣大臣の次男、

撰政関白、位は太政大臣。実名は良房、染殿後の御父。此皇后と申すは、文徳天王の後、清和天玉母儀、大帝太后宮明子と号す。烟祿は、猛火の名。雌雄は、勝負の名。珈瑾は、愁ひを残す事。

周公―上二二左4 旦成―上二二左5 忠仁公―上二二左5 烟祿―上二五左6 (回祿) 雌雄―上四六右3 珈瑕―上四六右5

延喜は、抑、我が朝の帝、醍醐天皇と白す。寛平法皇の初の御子。御母は内大臣高藤卿御娘、贈皇太后是なり。御年九歳と白すに東宮に立つ。十三にて位を受け執り、一天四海を掌どり、翠帳紅闌の内、万機の主と崇めらるるも三十三年。日本帝王六十代、上代にも将来にも有り難き御事にて、浅猿アサヅき田夫野人も賢き御事も延喜御日記に注せられたりと云ふ事なり。又、二代御日記と申すは、延喜天曆父子の御事。殊に拙アツく国を治めて、人貴く民安く、世栄えたりしかば、万の諺ことわざに其の帝の時の例を引ききて、冬の夜の嵐劇いんげしきには御衣を脱ぎ、民の寒きことを歎き、菅の根の長春の日の夕晚には、四方を詠めて国の患を思ふ。賢者の燈を挑かげ、愚愁の暗をぞ照らすと。延喜―上五七右5

而れども生死無常の悲しびは、御宝算僅かに四十六。延長八年(庚寅)九月廿九日に崩御なりたまひぬ。設ひ、浄土天上に生まれたまふとも、姫妃采女の昵ひつび、千乘百官の残り、争か悲しまざらむ。而るに、三失に依りて地獄に墮おつ。

- ① (山) による。(底)「十」  
② (山) による。(底)「随」

(以上、担当若名)

其の三失は、無実<sup>①</sup>に依つて北野の菅丞相を大宰府に移し奉りたまひし事。理に非ずして臣下を流すは主上の失なり(是れ一つ)。凡そ其の有様の勇ユウしかりし事は、延喜の初めの左右の大臣は時平の臣、本院の大臣と号す。冬嗣の御孫子、大政大臣基経照宣公の大郎に在す。右の大臣は参儀是善の朝臣の御子(御母は伴氏)、菅原右大臣道真と申しき。今は北野天神に在す。代継大鏡(第二)に云はく、帝最少オトく御在ししに、左右の大臣世の政を行ふ由、宣下せられぬ。時に左大臣は御年廿八九ばかり、右大臣は御年五十七八ばかりなり。而るに右大臣は才覚世に勝れ、御意オノココロ証も事の外に賢く御在し、左大臣は御年も才覚も事の外に劣りたまへり。故に右大臣は御覚へ有り難く、拙アツくぞ御在す。此の左大臣安からず思ひたまふ程に、右大臣の御為に安からざる事出で来て、昌泰四年正月廿三日、太宰府に移されたまふ。

- ① (底) は「代」継大鏡、(山) は「代」継大鏡」と訓点を施すが、訓読不能のためこのように訓み下した。

此の大臣は君達太多アツク在しき。皆程々に随ひて位共に御在す。又、女子達も在しき。少く御在しければ、君達皆慕アツクひ泣きたまへり。其

の時大臣兒き暗し、歎きの余りに思はれけるは、天氣既に此くのごとし。一天に誰をか憑みて此の濡れ衣を干さむと。心を廻らして寛平法皇に奉りたまふ一首の歌

ながれゆく我はもくづとなりぬとも

君しがらみとなりてとゞめよ

仙洞之れを哀れと、佐れども父子の御中に此の事一つばかりは何とかは叶はざる。帝は我が多くの御子の御中に第一の御子。位を受け取りたまふも、我が譲る所なり。責めても此の事を深く大事に思し食して、色を顕して自ら南殿に立ちたまひて奏す時、藏人頭菅根卿申しけるは、「我は菅丞相に顔を打たれし遺恨、未だ胸に在り。敢へて申さず。」と。力及ばず梨坏に立ち廻り、使ひを求め、希世の弁を以つて奏せられければ、帝言ひけるは、「天子に父母なし。偷言汗のごとし。返すべからず。」とて用ひたまはず。寛平法皇益無く、泣く泣く返りたまへば、故に親を見下げ奉り、父の命を背かる、不孝の科(是れ二一)。治天の時、久しく民の歎きを積む(是れ三つ)。此の三失の故なり。

① 黒田氏翻刻は「協」とする。

② (山)による。(底)「受二取位」。

爾に菅丞相は既に流されたまへり。都は遙かに成り行けば心細くて、

きみがすむやどの木ずゑをゆくくと  
かくる、までにかへりみるかな

西海を歎き下りたまふに、雲井の鴈都の方へ飛び行ければ、我は是れ遷客たり。汝は亦来賓たり。共に嘯々として、旅に身を促はす。枕を恃て、返らん事を思ふに、我は何の時か知らん。汝は明春と云々。筑紫に御在しける時、心細く哀れにて過ぎたまひける折節、此れ彼れ煙の立つを御覽じて、

ゆうされば野にも山にも立つげぶり

なげきよりこそもへまさりけれ

「都府の楼には纔に瓦の色を看る。観音寺には只鐘の声に聴くのみ。」此れも筑紫にて作りたまへり。彼の白居易の筆に、「慶愛寺の鐘は枕を恃て、聴き、香炉峰の雪をば簾を撥げて看る。」と云ふ詩に違はず作りたまへり、と昔の博士共は感じ申しけるとかや。

① 「淀(タダヨ)はず」か。四部本に、「此三ヶ年間流(西国波上)」(巻十二「平大納言被流」)などの例がある。

恩を見て御衣を賜はる菊の宴を念ひ出だし、紅梅殿の梅の鎮に西へ飛ぶなどせし事、滋ければ、佐のみは申すを得ず。此くのごとくに三年を送るに、延喜三年(癸亥)二月廿日五日夜(たまたま)御年五十九、哀れなりし例なり。荒人神と成り、北野天満天神と申すは是れなり。

① (山)による。(底)「佐」。

抑、朝家神威を恐れ、度々官位を贈りたまふ。所以に延喜元年に本の官に補し、延喜廿三年四月廿日左右大臣を贈らる。延喜延暦四年(癸巳)薨じてより九十一年過ぐ。帝王六代。一条院の御時。

五月廿日大宰府の靈廟へ一位左右大臣を送らる。宣命の御使武藏權介藤原朝臣幹正、六月比靈廟に於いて宣命を読む。退出の時、珠簾の内より青紙の書有り。風に随ふ。其の詞に云はく、荆棘の官品高く加はり、拜感喜ぶと雖も、仁恩逐堀を穿つ。但し恥づらくは、<sup>①</sup>役みて左遷の名を存すること久し。同十月廿日、贈大政大臣に任ず。御使菅原朝臣為理、十二月の比靈廟に到来す。大政大臣の宣命を得て託宣の句に云はく、昨日は北關に罪せらる、の士と為り今日は西都に恥を雪むるの屍と作りたり。存しては恨み、没しては喜ぶ。吾何ん。今は須く望みも足るべし。仍つて皇基を守らんと云々。

① 「没」か。赤木文庫本「神道集」「北野天神事」に、「唯羞存没左遷名」とある。

② (山)による。(底)「五」

抑、延喜の御孫子朱雀院の御子日藏上人、金峰山に行ふ。或る時菅丞相鬼人十二人に輿舁かせ、日藏の庵室の前を通りたまふ。之れを見て恐ろしく思はる、処に輿を押し、「日藏公は此れか。」と尋

ねらる。力及ばずして出で向かふ。輿にて冥土へ行かして、黒繩地獄門を通る。門に因りて、「此れに宗祖延喜の在すをば見奉らざりたまはぬか。」と云々。日藏、「望む所なり。」と言ひき。

時に菅丞相高音を放ち獄卒を呼ぶと、三返して其の旨を示したまふ。獄卒苒に申さし、物の枯木のごとくなるを指し出す。時に日藏公、「願はくは娑婆世界に在したりし形を拝せん。」と悲しめば、時に菅丞相、「本の形を以つて出し申せ。」と云々。其の時に獄門を開き、昔の形にて押し出し奉る。祖王を見て、日藏掌を合はせて延喜を拜す。爰に延喜泣く泣く言ひけるは、「汝、我を敬ふこと勿れ。

冥途は罪無きを以つて高しと為す。地獄の苦患は利那も堪へ難く、忍び難し。汝に依つて片時も休息せん。云ふべくも足らず。而るに我は三失に依つて奈落の苦を受けたり(三失は上のごとし)。汝は孫子と雖も、仏法修行の聖弟子なり。汝我を敬へば、弥よ我が苦増すべし。抑、我に男女に孝子廿六人有り。合力して大善を修して、我が往生を訪へ。」と云々。仍つて娑婆に還り、此の旨を語りたまひしかば、其の時延喜の御子廿余人して醍醐山を建立して禪定を析り成仏得道を訪ひたまふ儀、此くのごとし。

① (山)による。(底)「示」。

融大臣は大職冠の御子、談海公の舎兄。具平親王は村上天皇の第七の御子、後中書王と申す。中書王は中務の唐名。照宣公は冬嗣大

臣の子。冬嗣大臣は大戦冠の御子。小野宮は貞信公の嫡男。高明親王は延喜の御子、源氏の大將。天階立は天人天下りたまふ処なり。

融大臣―上六四左2 具平親王―上六四左3 照宣公―上六四左4 (昭宣公) 冬嗣大臣―上六四左4 小野宮―上六四左5 高明親王―上六四左6 天階立―上六五右1

(以上、担当谷村)

平家打聞 第二卷

① 庁の使は庁官の名。村上は醍醐帝の第四の太子。「丁未」即位。

在位廿一年。六勝寺は最勝寺、<sup>二</sup>法勝寺、<sup>三</sup>長勝寺、<sup>四</sup>安樂寺、<sup>②五</sup>福勝寺。

印鑑は座主補任の時、中堂の宝蔵を開く鑑。鳥羽院は堀河院第一の

王子。「戊子」即位。在位十六年。度縁は僧綱の官名。世美丸は延

喜第四の太子。此の宮の住みたまふ故に、彼の河原をば四宮河原と名付くるなり。四明は藏通別円を明らむる故なり。

① (山)「庁使」による。(底)「庁使」。

② (山)「福勝寺」による。(底)「福勝寺」。

伝教は、抑、日本国四明天台の嶺、比叡山の最初、根本伝教大師と申すは、比の山の本願なり。

慈覚大師とは、天台座主円仁内供奉なり。抑、伝教大師の御弟子に、天台座主一両三人の御中に、殊に有難く聞こへたまひし人なり。

所以は、初めの座主は義真内供奉なり。伝教大師の御弟子なり。後には修禪大師と号す。治山十二年。寂光大師は第二の座主なり。伝教大師の御弟子なり。治山三ヶ年。智証大師は第五の座主なり。智証は仁寿三年に渡唐し、天安二年の夏、帰朝す。生母の夢に、天の口口に入ると見て孕む所なり。或ひは云はく、天長年中に登山し、義真座主喜びて弟子と為すと。或ひは、慈覚の弟子とも云ふ。円珍小僧都是なり。治山四年。此れも伝教の御弟子なり。円仁内供奉は第三番に当たりたまへり。天台座主。治山十一年。伝教の弟子なり。後には慈覚大師と号す。叡山の門徒二分して、慈覚智証の門を諍ふと聞こへしが、智証は三井寺に移り、其の後山門は、一向慈覚大師の門流なり。

① (山)による。(底)「座主」。

抑、慈覚大師、俗姓は天生氏、下野国都賀郡の人なり。或ひは賀保関守が子とも云ふ。時に、彼の国に名高き徳至る僧在しき。広智菩薩と云ふ。小野寺の根本なり。兼て此の事を知り、慈覚大師未だ生まるる以前に、彼の父母に向かひて言はく、「胎内の子は只人に非ず。出胎の時は必ず我に告げよ。清浄に養はん。」と、懇ろに約束したまふと云々。漸く月満ちて慈覚大師出胎の日、父母の家に当たりて、紫雲<sup>②</sup>達きたり。遠近目を驚かす。広智菩薩、遙かに靈雲を見、彼の所へ到る。即ち慈覚初生の靈端なり。而して、父母、契

約を忘れず、広智菩薩に告げ奉る。路中にしてぞ行き合ひける。信仰を致し、膽り養ひ、幼雅<sup>③</sup>にて誓ひて、普門品を得て後に、自ら経論を開き、漸く聖旨を知れり。或時、夢の中に大徳来て、小児の頂を摩<sup>+</sup>で、告げて云はく、「知るや否や、叡岳の大師は仏法の棟梁なり。広く聖跡を継ぎ、普く群生を度したまへ。」と云々。遂に叡山に登りたまふ〔其の年十五〕。伝教に値ひ、互ひに初めより咲みを含み、喜びたまへる色深し。三十年浅からぬ親子兄弟などの中絶えて、自ら行き合へるがごとし。額を合はせて物語したまふ。密事<sup>④</sup>かは覚えて、細々と相語りたまへども、余の人は聞き知る事無し。人々意得ず。後に互ひに権者と頭はれ在しけん旨をば、宜<sup>⑤</sup>なるかとは知らんやと思ひ合はするなり。

- ① (山) による。(底)「父母」。
- ② 黒田氏翻刻「達」。
- ③ (百)「幼稚ニノ」。
- ④ (百)「密タル事カト覚シク」。
- ⑤ (山) による。(底)「宜」。
- ⑥ (山)「思合」による。(底)「思食」。

凡そ、此の大師は、十五才にして出家す。平城天王の治天第三年〔戊子〕大同三年。伝教帰朝の後、第四年。其の後、覚行勤行すること三十一ヶ年。智慧有頂の誉れ、徳行奇異の聞こへ、天下に及び無し。

時に、日本仁王<sup>①</sup>五十代、仁明天王と申すは、嵯峨天王の第二の太子、世を治むること十七年、深草の帝とも申す。此の帝言ひけるは、「我聞く、桓武天王、天下に二人を扱ひて道を異国に求めたまふ。即ち伝教弘法兩大師是なり、と。而るに、我亦天子を得たり。願はくは、法器を扱ひて、<sup>①</sup>仏法を大唐に求めん。」と。仍つて、<sup>②</sup>宣旨を以つて、国内に求めて上機を得。慈覚大師是なり。大師御年四十五にして、<sup>③</sup>宣旨を賜はりて渡唐す。時に、承和五年〔戊子〕なり。

- ① (山)「扱」による。(底)「扱」。
- ② (山)「四十五」による。(底)「四十五」。

抑、慈覚の渡唐は、唐の文宗の末、而も頭密得受限り無し。但し、其の後、六年と白す時、唐の武帝世を治むること六年。其の会聖<sup>④</sup>の年中に、仏法を破り、三宝の名号を失ふ。仍つて、出家の形を払ひ捨てらる。故に、慈覚長安を遁れて、<sup>⑤</sup>纒纒嶋へ隠る。而るに、彼の嶋の群賊に計られて、既に生命を失ふべかりしに、三宝を念じ奉れば、其の時、白き犬遁るべき道路を示す。仍つて其の難を免ず。

- ① (山) による。(底)「頭密」。
- ② (山)「計」による。(底)「計」。

又、大師渡唐の時、不思議の事有り。則ち、悪風に依りて、鬼界へ近付きたまふ。嶋の鬼神は形を隠し、唐船の寄せ来るを見て、喜<sup>①</sup>びて被口を開き、集まり立てり。時に、船中の上下、鬼気に酔ひて、

皆魂を失ふ。色を作し、今を限りとぞ泣き悲しみける。船頭も計を失つて、船底に臥しぬ。櫓槳を捨て、直さずして、風波にぞ任せける。爾の時、大師屋形の上に登りたまふ。南無大悲観世音と念じ奉る。則ち、毘沙門天王現来して、御足の片足を波の中へ差し下したまへば、直りて本の塩路に向かひ、念ひのごとく、程無く渡ることを得たり。嶋の鬼為ん方を失ひて、渚に倒れ伏して足擢りす。船人面々に心地直りて、合掌して勸喜す。時に、大師念言すらく、我、観音を念ず。何ぞ毘沙門来現するや、と。時に亦念はく、宜なるかな。經に観音の利生を説きて云はく、「応に毘沙門身得度即現(毘沙門身)」と。已上。是の如く念ひ合はするに、渴仰骨に徹り、随喜の泪袂を沾す。

① (山)「披開レ口」。②「披レ手開レ唇」。

大師、其の時の儀を絵に書きて、後に楞嚴院を建立する時、横河の中堂を、船に念ひを寄せて、背械作り<sup>セガイ</sup>に造り、御堂の後の壁に、此の儀を絵に書きたまふ。本尊は則ち、不動毘沙門なり。毘沙門は、御片足を坐より下へ差し下したまへる形なりと云々。

① (山)による。(底)「中堂」。

② (山)による。(底)「寄」。

(以上、担当稲田)

凡そ此の大師、大唐にして頭密の高僧、諸寺の長老に値ひて、仏

法を伝ふるのみに非ず。剩へ五台山に登り、文殊師子を拝み、御足の下の土を取りて来たまひつつ、観山文殊樓の壇に加へたまふ。惣じて大師、大唐には十六年。其の間に多くの奇特あり。委細注に及ばずと云々。

抑、伝教は延暦廿三年(甲申)渡唐、大同二年(丁亥)帰朝、首尾十ヶ年。頭密伝法、豈に数を尽くさず、底を極めんや。故に大師帰朝の時、大唐国の人々申しなは、我が朝の仏法、悉く和尚に隨ひて日域に行きぬと云々。是を以て日本一國の帰依、大師に深し。凡そ、仁明、文徳、清和三代の帝の御時の師徳なり。淳和、五条の后も同じく大師に対して、御受戒乃至灌頂に及びたまへり。

抑、我が朝には昔は小乗声聞の戒のみ伝はり、大乘菩薩別解脱戒は、伝教大師の伝へて渡したまふ処なり。而るを嵯峨天王の御時、伝教大師筆を振るひ、文を教へて頭戒論の三巻を作りて、弘仁の帝に奏す。弘仁十二年(辛丑六月夏頃)許し下し、官府を賜はりて戒壇を立つと。然りと雖も、猶を広大に及ばず。而して後、慈覚大師、頭楊大戒論八巻を注して、其れより広まりて、王臣道俗皆、大乘戒に帰す。誠に是れ天台圓頓菩薩、大乘戒の根源なり。

又、大師、深草の御門の御時、官府を申し下し、惣持院を立て灌頂堂を造らる。其れより以来、四百余歳。五瓶の清流の源上絶へず。①②  
三部の法水の流れ久し。又、唐相伝の御舍利に伝教大師の香呂の灰

の中より行ひ出でしかば、御舍利に加へ奉る。同じく惣持院にして舍利会始まる。此は清和天王の御時、貞観二年〔庚辰〕。但し、定日<sup>③</sup>をせられず、山の花盛りなることを契る。此くのごとき事、計り尽くすべからず。

① 振り仮名は(山)による。(底)なし。(百)「水上」

② (山)「絶」による。(底)「絶」

③ (底) (山)とも「不被定日」。(百)「不被定日」

爾も大師、老氣に及び、老眼の暗きを歎く折節、掌に熱惱あり。

仍ち根本杉の中にて法華を修行したまふ。夢の無き間に三十三天の甘露を得たまへり。其の味ひ、苳のごとしと覚へき。舌の上に余氣有り。其れより眼の力付きにけり。

① (百)「覚夢之間」

② 振り仮名は(山)による。(底)なし。

人王五十三代、淳和の御時、諸国に寺々を建立したまふ。其の後、只、山、洛中、畿内、近国のみならず。化道遙かに東夷が栖を過ぎ、利生遠く北狄の境に及び、師諸教に小<sup>②</sup>をせず。然りと雖も、諸師の徳行は皆、我が宗流に限る。自余に及び難し。而るに慈覚の御相伝大師の御遺跡、自門自宗他宗、更に背くこと無し。又、年月を経れば、弥繁昌するなりと云々。

① (百)「化導」

② (百)「不<sup>スナナチ</sup>少<sup>ナチ</sup>」。

懺法の儀式、引声の念仏、如法道場の作法、釈迦遺身の舍利会、常行堂<sup>①</sup>の役、摩多羅神の加護、如法経の書写、三十番神の守護、天台灌頂堂の儀、法花半座の行、此等併ら大師開闢の御跡。故に渡唐の大師を日域に尋ぬるに、慈覚帰朝す。誠に有り難し。伝燈の祖師を本朝に求む。大師の徳行、殊に秀でたまへり。

① 「復<sup>ハヒ</sup>」か。(百)「振舞」。<sup>②</sup>四部本卷第六「法皇御歎」に「入道承<sup>ハヒ</sup>、痛<sup>ハヒ</sup>無<sup>レ</sup>情<sup>ハヒ</sup>彼<sup>ハヒ</sup>事<sup>ハヒ</sup>有<sup>レ</sup>」とある。

既に濁世の法燈、未代の福田。是を以て貴賤同じく知識と馮み、都鄙悉く現当を契る。一山四海、偏に生身の世尊のごとく仰ぎ奉る。此くのごとく、有り難く在す人なれば、常住不滅に何つまでも隠れたまはずは、何か許<sup>ハヒ</sup>かは世の中の燈びと喜びあらむ。民の為大なる依怙、君の為臣の為、深き知識。然りと雖も三界の果報、同じく必滅の身、四生の依身は皆限り有り。命は有侍の悲しみとは、則ち是なり。秋の夜の月を見るに、更に聞けて、月西虚に傾く。跡の暗路の悲しみは、春日花を詠め、風起こりて蕭索として散らむ後を恨む。移り行く無常は皆惜しめども留まらざる歎きなり。故に三界の大師に在す釈迦如来、真言の高祖に在すといふ龍樹菩薩、天台の智者、法相の慈恩、禪の菩提多羅、律の終南山、我が朝の権者は上宮太子、行基菩薩等。皆以て久しく娑婆世界に遊びたまはず。愛別離苦の憂ひ、娑婆の口惜しきは会者定離なり。

是を以て慈覺大師、御年七十一にして、人王五十六代清和天王御宇、貞観六年(甲申)正月十四日に卒す。前年歳暮より小病小惱し、氣の始め、世間出世の万境を抛て、一向に称名念仏三昧なり。病中に常の言に云はく、「既に知りぬ。此界の因縁尽きて、唯西方を念ず。余をば念ぜず。」已上。臨終の異相、中々記すに及ばず。古今未だ曾て有らずと云々。

① (百)「從<sup>二</sup>病氣始<sup>一</sup>」

簀焚は、高祖の臣下。韓彭は同じく臣下。頽<sup>たふさ</sup>醜<sup>しう</sup>は、此等の臣下の誡め置かるる事。禍敗は、罪科に処せらるる事。衛府は太夫の官なり。安和は、延喜。北野は、菅丞相是なり。大公望は、仙人。生処死所、人は之を知らず。周の文王より幽王に至る十六代の帝に仕へ、二百九十年。

十九年経は、李広が妻、迦仙の人と云ひしが、檜を以て我が夫の形を造り、朝夕の飯酒を備ふ。夏冬の衣裳、著替せり。爾てこそ李広が命も死なず、十九年有り。李広は、蘇武。李陵は、蘇武が兄。永律は、李広が子。胡国に趣く時、百日に成る男子生長して十九才に成る。之に依りて大将の撰に当たり、且つは勅命を仰ぎ、且つは親父の敵を愚かに思はんや。百万騎を付けられける。

昔、巖岨に在るは、詩を作るなり。漢王、妻の迦仙の許へ遣る。

迦仙之を見て消え入るなり。別るる時は、李広十六歳、迦仙十四歳。

今、十九年を経て、別夫の手跡を見る心中、推し量られて哀なり。迦仙君主に返事の詩を奉る。「迦仙は衣を打ち、南樓の月に鳴く。忠臣未だ返らず、礼仁何づくにか在らむ。」漢王、弥恥ぢ悲しみ、急ぎ胡国に軍者を下されけり。

漢王は三千人の后在す。其の中に王昭君<sup>せうきゆう</sup>は形、万女に勝れたりと云々。爰に胡国の王に漢夜將と云ふ者の宝物を備へて参る。漢王御感の余りに、「汝何事か用ふなる。与へん。」と云々。胡王承て、「三千人の後の御中に下女と思し食さむを給はりて、我が国の君王と違<sup>ちが</sup>づかん。」と。漢王聞こし食して、自ら御覽じ尽くすべからず、「絵に書かせよ。」と。三千人の后達を似絵に書きける。余の後達は絵師に録を与へければ、吉き女形を書く。王昭君は本より、我が形は万女に勝れたりと思ひ、絵師に録を与へず。絵師、之に依りて悪女に書き成せる。故に、漢王、王昭君を胡王に賜ふ。万女に勝れたる人なれば、胡王喜ぶ事限り無し。道々の歎きと申すは中々愚かなり。

① 赤木文庫本神道集卷八第四十八「上野国那波八郎大明神事」に「偏<sup>へん</sup>神明三寶如崇<sup>たか</sup>進<sup>しん</sup>」とある。

而して僧都懷寿、此の心哀れみて

をもいきやふるきみやこをたちをはなれ

このくに人とならん物とは

後拾遺集懷圓法師の歌

みるからにか、みのかけのつらきかな

か、らざりせばか、らましやは<sup>①</sup>

同集赤染衛門の歌

なげきこそみちの露にもまさりけれ

なれにしさとをこへしなみだは<sup>②</sup>

同集頭照法師の歌

津の国のなにはのつみのむくいきて

我が身ひとつをあしくかきける

月詣集惟宗広言の歌

心からのたまのくつとはかへりけり<sup>③</sup>

なにかへしさのうらすせもせん

① (山)「歎かざらまし」

② 後拾遺和歌集「こふるなみだは」

③ 月詣集「こころから玉藻の屑とかくれにき何か多鳥のうらみしもせむ」

後に漢王聞こし食して、直ちに絵師をば張り付けらる。而るに王照君を返し奉る宣下なりけれども、女子太多儲ける上、胡国の王惜しみて返し奉らず。之に依りて胡国に責められけり。永律軍に勝ちて、又、王照君を与ふ。返り入りて漢宮へ奉りけり。而れば、王照

君は返るなりと云ふ説も有り。返らずと云ふ説も有り。朗詠には「身は化して早く胡の朽骨と為れども、家に留まりて漢の荒門と作る」と云ふ詩の心には胡国にて死にたりと見えたり。後漢書には王

照君、漢宮に返り入りて君王に形を見て悲歎に容ると云ふ詩の心では、返りたりとも見えたり。何れも相違有らず。朗詠詩には、胡

国に在りし時を作れば爾云ふなり。後漢書の詩には返りて後、作り

たれば爾云ふなり。

李広は死人のごとく返り来たれども、君王の一方の堅と成りて、昔のごとき武なれば、活武と書きて、蘇武と呼ばれけり。

關位上人は、西行なり。花山院は、冷泉院太子〔乙酉〕則位。在位三年なり。

(以上、担当若名)

平家打聞 第三卷

拝礼は公卿殿上人の直しき礼儀。朝勤は主と院との御対面。民共の正月の節のごとく行なはる。政務は万機の政を取むる。五瓶は花、<sup>二</sup>關、<sup>三</sup>伽、<sup>四</sup>水、<sup>五</sup>花の瓶。学生は勸学院に於いて男子共の学文する事。堂衆は下生の法師共。流沙は唐土と天竺との境。水流れずして土沙の限り流さる、河。葱嶺は彼の河の東岸に有り。別の草無くして<sup>①</sup>悲限り有る山なり。其の葱有る山の遠さは二百五十里。仏生国は摩

訶陀国。

拜礼―上六七左 4 朝勤―上六七左 4 (朝観) 政務―上六八右 1  
 五瓶―上六九右 1 学生―上六九右 3 堂衆―上六九右 3 流沙―  
 上八〇左 6 葱嶺―上八〇左 6 仏生国―上八〇左 8

① (山)「悲」。黒田氏翻刻「悲」。

五台山は生身の文殊在す山。抑、大唐に法照禪師として止事無き智  
 行高德の人在しき。常に生を末法に受けたる事を歎き、形を堯季に  
 交ふる事を悲しび、希に正法を聞くとも雖も、濁世の瓮ほぎを荷かいで出離  
 未だ一定せず。何れも為し何れも為し、我等凡く或ひは諸法師の勤  
 機三昧を具足せず。遂に叶はずして三悪道に帰す。宝の山に入りて  
 手を空しくして帰るがごとし。恥づべし、悲しむべし。故に大聖文  
 殊を尋ね奉り、五台山に登りけり。

五台山―上八一右 6

① (百)「何為々々(イカッセン)くか。」。

② (百)「凡惑ナリ」。

① 所以は何となれば、人身は受け難く、希に受くるも喜びなりと雖  
 も、在世にも生ぜず、天竺にも生ぜずして、東海の辺に生まるるこ  
 と是れ深き恨み。仏法聞き難く、適聞けば掌なりと雖も、正法も過  
 ぎ像法も過ぐ。如来滅して後一千余歳を経、値ふ事を得たり。大い  
 なる悲しみ。而るに文珠三世の覚母、九代祖師の位は大覚に隣りた

まふなり。悟り既に究竟せり。常に又諸仏の御前に在して、転法輪  
 に烈みたまへり。大智物に覆ひて、一切衆生の發菩提心は文殊教化  
 の力。而るに此の菩薩は常に近くは五台山に在すなれば、身を捨  
 て、尋ね奉り、而して若し尋ね相ふの事奉り有らば、無量の法門の  
 中に出要を差して奉りたまはらん。又、生きて相ひ尋ね奉らずば、  
 只此の山を出でずして死せんと誓ひて、彼の山に向かひたまふ〔經  
 に、五台山の石は其の功德四果上人に超えたり。已上文殊般若〕。  
 時に唐第の帝太宗皇帝〔十八年の日を治む〕の第八年天曆四年  
 〔庚戌〕、唐の高祖の元〔年〕〔戊寅〕より百五十二年、仏滅〔癸酉〕  
 より一千七百九年、日本人王四十九代光仁天王の始め宝龜元年に当  
 たれり。

① (底)「所以者何」。(山)「所以者何」ともに判読不能。(百)は  
 「所以者何」とする。

② (百)「幸ナリト」。

④ (百)「五台山ニ近ツキ常ニ」。

⑤ (百)「指シテ出要ヲ尋ネ奉ン」。

⑥ (山)による。(底)「玉上」。

⑤ (百)「八」。(山)ナシ。

人跡絶えて聳へたり。鳥獸も音信せず。何が心細かりけむ。而も  
 道を念じ他念無し。遙かに登りて先づ一つの石門を見る。左右に重  
 子有り。則ち善財、難陀と号す。禪師に問ひて云はく、「此の山嶮はげ

く高し。汝何の志<sup>コト</sup>有りてか登れり。」と云ふ。爰に法照此くのごとき事を語りし。時に二(人)の童子、禪師の手を引きて漸に入らむ。亦一つの金門有り。其の高きこと、百尺ばかり。其の金門に入りて後は微妙の勝地、玉と金とを踏みて黎水河と昆崙山と和合せるがごとし。縦横廿余里ばかり。又、金の階を歩んで入る。其の階の爲<sup>ため</sup>体虹のごとく、辺りに衆鳥有りと云々。実に衆宝莊嚴樓閣、窳<sup>う</sup>を並べたること一百廿院。此くのごとく経曆して、遂に大聖行林寺に詣つ。

- ① (山)「音信」による。(底)「音信」。
- ② (山)「左右」による。(底)「左右」。
- ③ (百)「入ルニ」。

則ち普賢、文珠二大聖並びて光を在す。普賢菩薩は七枝六牙の大白象に乗り、其の象の上に三人の化人在す。一をば金剛拈<sup>②</sup>、一をば摩尼珠を捧げ、一をば金剛鉢を把る。五十種の光明其の身を具足して、衆多の菩薩前後に囲遶す。諸仏の長子在せば首楞嚴三昧の威徳実<sup>③</sup>に気高く、恒順衆生の菩薩なれば大慈大悲色を顕したまへり。文殊師利菩薩は又、師子の座上に在す。其の師子王は六度満足の体大にして、万行諸波羅蜜の膚へ肥えたり。大聖文殊は則ち一万二千の菩薩を眷屬と爲して、左右に侍り。凡そ此の菩薩は三世に成道す。過去には龍樹上智尊王如来、現在は歡喜摩尼宝積仏、未来には普賢

現世尊なりと思ひ連ねたるに、涙双眼に浮かみ、五体を地に投げ稽首作礼し、長跪して掌を合はす。

- ① (百)「光ヲ並ベテ在ス」。
- ②③④ (百)「はいずれも「二八」」。
- ⑤ (百)「二」
- ⑥ (百)「歡喜藏摩尼宝積仏」。

二菩薩を以つて言さく、「末法の凡夫、聖を去ること遙かに知識劣にして、垢穢最も深し。仏法玄広にして結行無辺。諸法門に於いては何れの法門を修し、何れの法を行してか成就易く、疾く成仏を得む。唯願はくは大聖我をして解脱し、疑網を断たしめたまへ。」

と。文殊師利言はく、「汝已に念仏せよ。今正に是の時、諸修行門は念仏に過ぎたること無し。一切の諸波羅密甚だ深く、禪定乃至諸仏は皆念仏により生ず。汝等が常に無上法王を念<sup>②</sup>に応じ、休息無からしむ。此界を去り正しく西に阿弥陀仏有り。彼の仏の願力不可思議なり。命終する時決定して彼の国に往生し、永く退転せず。速やかに三界を出でて、疾くぞ成仏を得む。」と。此の語已<sup>③</sup>はる時、二大聖各々手を舒べて法照の頂を摩で、授記を爲して云はく、「念仏を以つての故、久しからずして疾く無上菩薩を証す。若し善男善女人等疾く成仏せんと欲さば、念仏のみ過ぎたるは無し。」と。

- ① (百)「二」。
- ② (百)「念」。

③ (百)「一」。

玉泉寺は大唐に智恵高行の僧有り。余事をば傾せず。只偏へに富貴を欣ぶ。過去の宿執にや、大富長者と成りぬ。之に依つて、金銀を以つて瑠璃を伏せ、其の家を莊る。居し程年闌けて、齡傾きて死す。家に忘執を留めしかば、鬼王と成りて家の天井に伏せり。故に其の坊内へ入ること無し。適内を見物する人者をば、此の鬼取りて之を食する間、人跡絶えはて鴉菟の栖と成りぬ。爰に智行高名の僧有り。誠に此の坊へ行き見遶るに、心も詞も及ばれず。東には柳桜を殖え、北には白土を以つて雪山を植せり。木の丸殿の有様も実に優美なり。西には紫竹呉竹を別け殖えたり。南には池有り。池の結構には金銀水精を交へたり。玉泉を杵へたる。玉泉坊と名づけたるも理と思ふ程に、秋の中華なれば、萩の下露に月光耀きて玉かと覚えて面白なれば一首の歌を詠む。

たまのいづみもとのあるじはなけれども

うはのそれなる月ぞやどれる

之を聞きて天井より、「咬」と云ひて出で来る者を見れば、色赤黄にして青き体為したり。此の僧則時に消え入りぬ。彼の鬼王之を見て、生活気を吹き懸ければ則ち活へる。鬼王泣く泣く此の僧に語りて云はく、「今夜より後は此の坊は御辺に奉る。後生を訪ひたまふ

べし。」とて失せにけり。爾の時、此の僧喜び此の寺の長老と成りぬ。其れより此の寺を玉泉寺と名づけ、拜壇寺と云ふもなり。

玉泉寺―上八一右6

日吉山王は鎮護國家の靈神、円宗の守護。神道は遙かに其の最初を尋ね奉れば、大嶺の頂、修禪の石の上に繋ぎける。常樂我淨の四徳波羅密、彼の時より彼の峰に住す。今、伝教大師一乘円宗を此の山に弘めたまふ。麓に下りて、山王権現と頭れたまへり。廿一社の上七社、第一の宮をば大宮法宿権現と号す。本地は大恩教主釈迦牟尼如来。二の宮は地主権現高座天王、是れ本地は薬師如来。三の宮は聖真子権現、本地は阿弥陀。四の宮は第八王子、本地は千手。五の宮は客人の宮、本地は十二面。六の宮は十禪師権現、本地は地藏。第七は第三王子、本地は普賢菩薩。此の外八王子、王子の宮、大行事、早尾等は、虚空蔵、文殊、多聞天、不動尊等。惣じて上中下廿一社、皆或ひは法王齊ひとし、或ひは等覺分に居、究竟を証せり。慈悲を並べたまへり。伝教、慈覺御在生の時より本地を頭したまへり。以来既に五百才に及ぶ。況んや小比叡修禪の昔は雲霞の隔て幾千年とも知れず。

日吉山王―上―一三四左4

花山法皇は日本の帝王六十五代の帝。冷泉院の第一の御子。御母は贈皇后懷子と申しぬ。大政大臣伊尹の第一の御娘。二才にて東宮、

天元五年〔戊午〕二月十五日御元服。御年十五。永観二（年）〔甲申〕八月廿八日位に即かせたまふ。御年十才。此の帝は御形言柄誠かたに有り難く、御身の才覚も亦、殊に勝れたまへり。慈悲の心深し御まご事にて、遂に遁世の御心有り。那智山に籠りたまへりと云々。

花山法皇―上―三五左<sup>5</sup>

（以上、担当谷村）